

聖書:使徒の働き20章13~38節

説教:恵みのみことばにゆだねます

はじめに

パウロはいま三回目の伝道旅行を終えてエルサレムに帰る途上にあります。今回は、その帰り道に寄ったトロアスという町で起きた出来事を取り上げました。教会の人たちを招いて集会を開くのですが、翌朝出発が決まっていたので集会は深夜にまで及びます。そうしましたらユテコという青年が居眠りをする。三階の窓に座っていたものですからバランスを崩して下に落ちてしまいます。駆けつけてみるともう息がない。けれどもパウロがユテコの上に身をかがめ、抱きかかえ、「心配することはない。まだいのちがあります」と語ったところ、ユテコが息を吹き返し、その後はまるで何事もなかったかのように、パウロはパンを裂いて語り合っていきます。これらのことから、ご自身のみからだを裂いて私たちのためにいのちのパンとなってくださったイエス・キリストのことを思い起こすことになりました。

今日の箇所では、トロアスから出発していくつかの港に寄りながらミレトスにやって来たときのこと書かれています。近くにはパウロが開拓したエペソの教会がありますが時間が限られていたので人をやり、エペソ教会の長老に足を運んでもらい、別れの挨拶をしています。そこで彼は何を語ったのか。その事は今の私たちとどのような関係があるのか。ともに見てまいります。

## 1 パウロ

### 1) 涙とともに主に仕えてきた

長老たちにパウロは19節でこう語ります。「私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。」ここだけ読むと自慢話をしているようにも聞こえます。でも私たち、パウロがユダヤ人から何度も殺されかけるような迫害を受けてきたことを知っています。彼が語っていることは嘘でもはったりでもありません。試練の中で涙とともに主に仕えてきた、正直ほんとうに「つらかった」と言っている。

世の中にはこんなふう言う人がいるでしょう。「パウロは信仰者の模範となるべき人なのだから、人前で弱音を吐くべきではない。もっと堂々とした態度をとるべきだ。」でも、私たちはこのことから教えられます。つらいとか、苦しいとか、涙を

流しましたとか、それは別に隠すことでもないし、信仰が弱いということでもない。つらかったらつらいと正直に話せる。教会は一人の悲しみとともに悲しみ、一人の人の苦しみをともにしていく。そういうところなのだと言われます。

### 2) エルサレムでは鎖と苦しみが待っている

そんなパウロは、五旬節に間に合うようにとエルサレムに急ごうとしています。そこで何が待っているか。23節。「ただ、聖霊がどの町でも私に証しして言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。」

鎖と苦しみが何を意味するか、21章以降を読むとわかります。パウロは律法に反することを教えているとユダヤ人から訴えられ、町中が大混乱になるほどの大騒ぎになり、ローマ軍に逮捕される。確かに御霊が言われたとおりになっていく。

### 3) 任務を全うする

それがわかっているのにそれでもぜ行くのでしょうか。理由は22節です。「ご覧なさい。私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます。」御霊が語るのですから、それは神の命令です。神の命令なので、いやだけれど残りの人生を諦めて、仕方なく、消極的に従っていったのか。

それは少し違います。というのは彼が24節でこう言っているからです。「けれども、私が自分の走るべき道りを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分の命は少しも惜しいとは思いません。」

私もいつかこんなふうに言ってみたいものですが、とてもできそうにありません。パウロは消極的に従っているのではなく、どのような結果になろうとも命は惜しくはないと言って従うことを積極的に受けとめています。

### 4) 主に愛されている

どうしてそこまで言い切れるのか。やはりそれは彼がかつて何をしてきたのか、その一点にあるように思います。彼がまだユダヤ教パリサイ派の若きリーダーとして燃えていたときのことです。律法に反することを教えているキリスト教会はユダヤ教の敵であると信じ、男でも女でもキリスト者とわかれば牢獄に投げ込んで徹底的に迫害していた。ス

テパノが逮捕され、石打の刑にするかどうか決める  
ときも賛成票を投じていたなぜそこまで徹底的に  
迫害したのか。律法にはこうあるのです。「あなた  
の心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あ  
なたの神、主を愛しなさい。」(申命記6章5節)  
神を愛すると言う目的を果たすために、力を尽く  
して教会を迫害する。それが正しいことであると  
信じていた。

ところがあるときパウロはよみがえられたイエ  
スに出会ってこう言われるわけです。「サウロ、サ  
ウロ、なぜわたしを迫害するのか。」神を愛する  
ために一生懸命やったことが、実は神を迫害する  
ことになっていた。これは大変な罪です。死は免れ  
ない。もうだめだ、と思った。ところが主イエス  
はパウロの罪を赦します。こんな罪人のために十字  
架におかかりになりいのちを捨ててくださった神  
がどれほどパウロを愛しているのかを味わってい  
きます。

そんなパウロを、こんどは主は福音を語る者とし  
て召し出していく。その時神はこう語っていました。  
「彼がどんなに苦しまなければならぬかを、わ  
たしは彼に示します。」(9章16節) 召し出された  
ときから、苦しみにあうと言われ、実際にそうな  
った。あまりのつらさに涙を流して泣いたこともあ  
った。それでも彼は後悔しない。なぜでしょうか。  
それはやはり、罪の中に死んでいた自分であった  
のに、どれほど愛して下さっていたか。それを知っ  
ているからではないか。その愛の中で今日まで生  
かされてきている。それほどまでに愛して下さる神  
の福音を証しできるのならば、最期は死ぬこと  
になっても惜しくはない。それが自分に与えられた  
任務であることをわきまえています。

## 2 教会

1) 苦しみ(狼が入り込む、曲がったことを語る  
者が出る)

そんなパウロの口を通して福音が語られ、救わ  
れる人たちが起こされ、教会が建てられていきます。  
長老が選ばれました。組織はできた。でも、最終  
ゴールではない。実はそこからが本当のスタート  
になる。というのは教会が試練を通らなければな  
らない。どんな試練でしょう。人と人と関係でし  
ょうか。経済的な難しさでしょうか。確かに、かつ  
てこの教会もそういうところを通ってきました。

でも、もっとも大変な試練がある。なにか。パ  
ウロは二つ挙げている。一つは、凶暴な狼が教会  
の中に入り込んでくること。二つ目は、あなた自  
身の中から曲がったことを語る者が出て来る。こ

の二つです。この二千年間、教会はこの問題で苦し  
み続けてきたと言ってもいいくらいです。以前、礼  
拝説教の奉仕で招かれてある教会に伺ったときこ  
とを忘れません。その牧師が教えてくれました。  
「何年前かに教会が分裂して信徒の多くが去りま  
した。」立派な教会堂があるのに、そこに集って  
いるのは数名しかいない。外からなのか、内側か  
らなのかわかりませんが、教会の中に異なる福音  
が入り込み、群れが荒らされたのだらうと思いま  
した。そういう話は一つ二つではない。今も起き  
ています。

2) 自分自身と群れ全体に気を配りなさい

そうしますと誰もが考えます。そうならないた  
めにはどうすればよいのか。28節です。「あなた  
がたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。」  
これは教会の監督に立てられた長老に言われてい  
るのですが、ことばの順番に注意してください。監  
督する者が「群れの全体に気を配る」のは当たり  
前です。でも、その前に、「自分自身に気を配りな  
さい」と言われる。それが先です。言い方を変え  
ると、自分自身を省みようとしないうちは、群れ全  
体に気を配ることはできない。そうなる。

私は牧師として群れを監督する立場にあるわけ  
ですから、これは身につまされる話です。私の役割  
は、教会の外から狼が入り込まないか、目を光ら  
せることにあります。もちろん最初から狼のなりを  
してくる者はいません。羊の皮を被っている。で  
すから羊の皮の下に何があるか見分ける目がなけ  
ればならない。どうやったら見分けられるのかと考  
えるわけです。パウロはなんと行ったか。自分自  
身に気を配りなさい。自分のたましいを見張りな  
さいと言ひ換えられる。自分はできているのかと私  
自身いつも問われます。

## 3 神

1) 恵みのみことば

このことは監督、長老と呼ばれる人たちだけ  
ではなく皆さんにも語られていることです。凶暴な狼  
になりたいと思う人はいません。最初から曲が  
ったことを語って分裂させようと思う人もいませ  
ん。それでもいつか起こりうる。そうならないた  
めに日頃から「自分自身に気を配る」必要がある。  
では、自分自身に気を配るとは具体的にどうす  
ることなのか。

その答えが32節です。「今私は、あなたがたを  
神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、  
あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべて

の人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」

私たちはなぜ教会に来るのでしょうか。私は「皆さん、教会に来ないといけません」と言いません。言わないのに、今朝もこうして集まってくる。実に不思議、奇蹟だとさえ思うときがあります。いったい私たちは何者なのでしょう。パウロが確認している。私たちは、「神の恵みのみことば」を受けた者です。そのみことばは、私たちを成長させてくれる。信仰の先輩たちとともに神の御国に入る約束をますます確かなものとしてくれる。それが信じられる。それで教会に集まってくる。

## 2) 神に対する悔い改めと信仰

でも、神の恵みのみことばと言ってもまだ漠然としています。もっとわかりやすく言えばどうすることなのか。それが21節です。「ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証してきたのです。」

パウロがユダヤ教パリサイ派のリーダーでいたとき、自分自身に気を配る人であったのでしょうか。彼は律法は知っていました。神を愛するために心を尽くすべきであることも知っていた。でも主イエスに出会ったときわかったことは、自分自身には気を配っていなかったということでした。自分のたましいの奥底にある神に対する罪を見ようとしたくない。隠し通そうとした。それで一生懸命クリスチャンを迫害していた。自分を省みることのない者は人を傷つける。ひいては神を迫害することになる。そのことを教えられました。

でも、もしみことばを通して自分の罪に向き合うことができるならどうなるか。必ず神に対する悔い改めに導かれていきます。そんな私たちが神がどれほどに愛して下さっているのかが、ますますわかるようになる。そのようにして成長させていただき、主イエスに対する信仰をますます強くすることができる。そこにはもはや狼も入り込むことはできないし、たとえ曲がった福音が語られたとしても何が本物で何が偽物か、見分ける目が与えられているので、いつの間にか消えてなくなる。

主イエスから恵みのみことばを受けた者であることを改めて覚えたいと願います。